

二十五、善無畏三蔵伝説

善無為三蔵というインドの高僧にまつわる話が若杉山には残っています。

善無為三蔵

弘法大師とともに真言八祖としてお祀りされています。東インド烏荼(オリッサ)国の王子として十三歳で王位を継承しましたが、内紛のため出家し、インド最古の大学那爛陀(ナールンダ)寺で学び、真言密教の奥義を授けられました。玄宗皇帝の開元四(七二六)年に入唐し、そこで密教典四部十四巻を翻訳しました。その中の「大毘盧遮那成佛神変加持經(大日經)」は真言密教の根本教典の一つとされます。『日本書紀』編纂に参加した僧道慈は入唐時、善無為三蔵に師事したとも言われています。

若杉山の金剛頂院と太祖神社上宮の間に、グーズ若杉山頂に向かつて歩いていきました。

若杉山麓にさしかかると、一匹のグーズ(大亀)がどこからともなく現れ、善無為三蔵に向かい頸を長く伸ばし、自分の甲羅に乗りなさいという仕草をするので、その上に乗るとグーズはゆつくりと山頂に向かつて歩き出しました。

やがて山頂付近になると、グーズは突然止まり動かなくなりました。

善無為三蔵は、グーズに厚くお礼を言い、無事に山頂の八大龍王のお祭りを懇ろに行うと、グーズはそのままの格好で、岩になってしまったということです。

この他にも若杉山には善無為三蔵にまつわる伝説があり、山頂付近には善無為三蔵の祠もあります。「挟み岩」は、善無為三蔵が杖で大岩を割った跡とされ、九州で最古級の「木造千手観音立像(福岡県指定有形文化財)も善無為三蔵がもたらしたものか?とも言われています。また若杉山中腹の養老乃瀧は、善無為三蔵が開基の寺とされています。

岩と呼ばれる亀の形をした大岩があります。この岩には次のような話が伝えられています。

聖武天皇のころ(七一二〜七二四)、密教八祖大師の第五祖であるインド出身の高僧善無為三蔵(貞観十一年(六三三)〜開元二三年(七三五))は、布教のため日本へ渡航することになりました。

おりよく乗船し、遠く異国のことをかんがみながら時を過ごしていると突然、大暴風雨になり、善無為三蔵を乗せた船は木の葉のように翻弄されました。今にも沈没するかと思われたとき、善無為三蔵は若杉山の方向に手を合わせ、山頂に奉られている八大龍王に「この船が無事に筑紫の港に着きますようお守り下さい。無事に着きましたら必ずお礼のお祭りをします。」と懇願されました。すると波がおさまり、船は数日後には無事博多の港に到着することができました。

疲れ果てていた善無為三蔵は立つこともできないほどに弱り切っていましたが、約束どおり八大龍王にお礼参りに行かなくてはと、気を引き立てながらかではありません。

参考文献

『篠栗町誌(民俗編)』篠栗町

『かすやの昔話』糟屋地区文化財担当者

篠栗町歴史民俗資料室